族の生存についても不明であると言われた。チェコスロバキア建築家同盟議長のゴチャール氏は、レツルについて全然御存知なかった。…建築家同盟では、結局レツルの関係者はわからなかったが、後日プラーハ放送が、ニュースの時間に私の訪門を報道してからは、レツルの親戚や友人の方から、是非会いたいと招待の手紙を戴いた。亡き夫君と共に、レツルとは美術専門学校からの親友であった八十五歳の老婦人は、チェコで最初の婦人建築家という先覚者で、エジプトや日本からのレツルの尨大な手紙を保存されていた。レツルは生涯独身であることもわかった。』

資料　チェコ人だった原爆ドーム設計者（藤田文子。「世界」1969 8 月号の内）

11. 「うは矢」とは何か

問　「宮城県史」第2巻の46頁に、「うは矢」ということが出ていますが、何の説明もありません。辞書を引いたら「うは矢」は「上矢」で、上差の矢とあります。どのようなものですか。(1)

答　「宮城県史」のその個所は、慶長19年〔1614〕大坂冬の陣に出動した伊達政宗が、12月9日攻城部隊に下した軍令を述べたものです。この軍令は「貞山公治家記録」(2)巻之24の慶長19年12月9日の次の記事から採っています。『九日丁亥〔ひのとい〕。早朝ヨリ御歩小姓組、御不断組、御給主組、御名懸組、御鷹師組并ニ御足軽マテ三千餘人ニ御料理ヲ下サル。時ニ公御小袖(3)黒地ニ御肩衣(4)〔かたぎぬ〕戻御裁付(4)〔たちつけ〕鶉重〔うずらがさね〕ヲ着玉ヒ、御出アリ。御料理下サル。以後御自筆ヲ以テ、御定書〔おさだめがき〕相出サル、左ニ載ス。

定

一、一闇〔いちのくじ〕取候衆壁ノリ可申事、

一、二番闇ノ衆堀キハヘヲシヨセ、スキマナクウハ矢可打事、

一、各乗入候而モ、ウハ鉄炮打候衆、手ヲチラサスウチニテ合戦之心懸第一ニ候事、

一、濫妨〔らんぼう〕ニカヽリ候モノヒケウ〔卑怯〕タルヘク候、其上科〔とが〕ニ可申付事、

一、ウハ矢能仕候衆、見届褒美可下置事、』

「伊達治家記録」（平重道編、宝文堂版）は、「ウハ矢」に『上矢、上差とも言う。箙(えびら)の征矢(そや)にさし添える二筋の矢、鏑矢又は雁又の矢を用いる。』と辞書的な注解をつけています。しかし、この場合の上矢は、第一線部隊の突入を容易ならしめるための、第二線部隊の掩護射撃のことであります。「上」とは、石垣をよじ上って前進する味方将兵を損傷することなくその上方を通り越して、敵勢に到達させるための、矢道の位置を指すものであります。上の軍令第3条の「うわ鉄炮」も、

同一目的の掩護射撃を意味するものであります。「東藩史稿」巻之4（作並清亮）では、このことをやゝ納得の行く表現で、次のように記しています。『九日、公弓銃隊ノ士卒三千餘人ヲ饗シ、自筆ノ訓令ヲ下ス、其大意第一ノ籤ニ当ル者壁ニ傅〔つ〕クヘシ、第二籤ノ者壕ニ臨ミ上箭〔うわや〕ヲ射ルヘシ、第一ノ者壁ヲ越ルモ第二ノ者上矢ヲ停メス、壁内ノ戦斗ヲ補助スヘシ、若シ妄ニ射ヲ止メ壁ニ傅カハ、之ヲ卑怯ト為シ罪ニ問フヘシ、能ク上箭ヲ射ル者ニハ賞ヲ行フヘシ』

辞書的な「上矢」は、もはや中世の悠長な遺物であります。名将政宗が、難攻不落の大坂城攻撃に、非実戦的な上矢を終始連射させようとすることなど凡そあり得ないことであります。政宗は、部下兵力を2分し、第一線部隊に城壁突破、第二線部隊にはその掩護射撃の任務を下命しました。第一線部隊の勇戦は当然のこととし、第二線部隊の一糸乱れぬ掩護射撃こそ、この作戦の成否に大きくかかわるとの確信から、その軍令の中で特に強調したのが、上矢・上鉄炮なのであります。

注(1) 「松屋筆記」〔まつのやひっき。高田与清〔たかだともきよ。江戸末期の国学者。本姓山田号は松屋。群書を蒐集し、考証の学に通じた。〕著。もと120巻、今84巻。20余年にわたって読破した和漢・古今の書籍の中から、会心の章節を抜抄して考証・評論を加えた書〕に『うわざし上差。軍将の壷胡籙〔つぼやなぐい〕ニハ、征矢〔そや。実戦用の矢〕十九本、内ニ入レテ刺ス、コレヲ中差〔なかさし〕ト言フ、別ニ一本ノ鏑矢〔かぶらや〕、又は雁股〔かりまた〕ノ矢ヲ表〔うえ〕ニ刺ス、是レ上差ノ矢ナリ。神社ニ祈願スル時ニ上差ヲ奉ルト言フハ、此大雁股ナリ。上差ノ矢ナルヲ略シテ上矢〔うわや〕トモ言フ。』とある。

注(2) 「宮城県史」第2巻に次のように記している。『慶長十九年十月一日、家康は大坂征討の命令を発した。……政宗は十月十日仙台を出発し、征途に上った。……十月二十日、政宗は将軍秀忠の先鋒となり、一万八千の兵を率いて江戸を出発し、十一月五日大津着、十一月一日家康に謁した。十五日、家康は大和国から大坂に進撃しようとして奈良に着いたので、政宗も命により二十日大和の木津に陣し、さらに二十九日摂津国仙波に進んだ。十二月五日政宗は山岡重長に命じて家康より鉄砲三十挺を借り受けさせ、九日次の軍令を発して大坂城攻撃の将士をはげました。〔軍令前出につき略〕政宗勢の大坂城攻撃は続けられ、十二月中旬堀際七、八間の所まで攻め寄せた。しかし大坂城はさすがに堅固だった。十二月二十日、家康は一旦豊臣方と和議をはからねばならなかった。二十八日、家康は政宗の応援に対して報いる意味から、政宗の長男（庶子）秀宗を十万石の大名に取り立て、伊豫国宇和島に封じた。……さて豊臣方と徳川方の和議が成立し、約によって大坂城の石壁をくずし外堀が埋められたが、さらに内堀までも埋められた。政宗もこの工事を課され、翌慶長二十年正月二十三日竣工して京都に赴いた。〔なお、夏の陣について〕慶長二十年四月再び戦争がはじまった。これよりさき江戸にあった政宗は、四月九日征途に上り、二十一日上洛五月五日松平忠輝の麾下に属し大和国に赴き、六日道明寺の戦で敵将後藤又兵衛

基次等を討ち取った。翌七日大坂城が落ち、豊臣氏は滅亡した。……閏六月十九日政宗は戦功により正四位に叙し参議に任ぜられた。』

注(3)　こそで。礼服の大袖の下に着用する小さい袖の衣服。

注(4)　かたぎぬ。武家の礼服で袖がなく肩から背にかけて、小袖の上に着用する。背の中央と両の袵〔おくみ〕に家紋を付け、下は半袴を用いる。

注(5)　裁着、たっつけ。たっつけ袴。袴の一種で、裾を紐で膝の所に括りつけ下部が脚胖仕立となったもの。伊賀袴ともいう。

注(6)　命令、統制を乱す無法な振舞。

資料　東藩史稿巻之4（作並清亮）

12.　伊達綱宗の享年

問　伊達綱宗の歿年齢が、本によっては71才と書いてあるものもあり、72才としてあるものもあります。どちらをとるべきでしょうか。

答　伊達綱宗の享年について、71歳とするもの、72歳とするもの、また73歳とする三様の系図書や本があります。それらのものを整理しますと、次のようになります。

1,　71歳とするもの

雄山公〔綱宗〕治家記録巻之下

東藩史稿巻之5（作並清亮）〔『但譜系系図並〔とも〕ニ七十二ニ作ル』と註記〕

伊達氏歴代一覧表（「宮城県通史」（清水東四郎）所載）

伊達騒動（平重道）〔同書中の年表には72歳とある。〕

仙台市史第7巻〔P 388に17とあり、71のミスプリントか。〕

2.　72歳とするもの

新訂寛政重修諸家譜巻第762

伊達家史叢談首巻（伊達邦宗）

伊達略系（作並清亮）

伊達家略系一覧表（作並清亮）

伊達家系譜（天嶺編）

東藩史稿巻之5、（作並清亮）〔正徳元年六月四日薨ス、年七十一、○譜系系図並ニ七十二ニ作ル。〕